

○平成二十三年度

一学年校外学習

太陽の木漏れ日浴びてすくすくと育つ緑は竹の子のよう
暑い中日陰を探し頂上へ草木の音に耳傾ける
そよ風の涼しさ胸に登りゆく暑き日差しは初夏の心地か
山寺の自然と風を感じつつ仲間とともに石段上る
晴れ渡る青空共に奥之院登山者達を見守っている
高い木々緑豊かな山寺や桜も散つて桃色の雨
登るごと美しくなる山景色疲れ忘れてついつい見とれ
山寺に生ゆる大きな木々よりも小さき花が大きく見ゆる
新緑の夏のきざしに胸おどりああ待ち遠し情熱の夏
頂上を目指してのぼる山寺はまるで夢追う人生のよう
せみ塚に松尾芭蕉の俳句あり詠むその声に耳を澄ませる
萌ゆる山自然豊かな木漏れ日の光を浴びて時が休まる
山寺の寺院に耳を傾けて一つ一つの意味を味わう
長い道長い階段心に水だが行く手には美心眠る
響いてる緑の木々や虫の声風の音色が舞い踊るよう
陶芸を作る間際に撮った写真これが中学最初の思い出
友達と山寺登り終えるころ友との絆更に深まる
果てしない歴史という名の石段の頂き目指し一步を歩む
山寺の石段多し汗流し友と歩みし光の道を
そびえ立つ仁王門に立つ巨像人々見守る二人の仁王
思い出に留めておきたい山寺の長い石段初夏の草花
天あおぎ新緑の風しみわたる古の旅いざ我も行かん
五大堂ふいてくる風は何時何処へふいて消えては今をかけ
五月晴れ段をふみしめ山寺へ青葉輝き心清らか
五月晴れ下界を眺め心晴れ芭蕉のころへタイムスリップ
山寺の方角の空見上げつつ新緑の山われも行きたし
励まし合い頂上に着き得たものはきれいな景色仲間の絆
立石寺新緑の中また一步古い階段新しい友と
山寺の階段長く険しくてこれぞまさしく修行の場なり
思い出す多き階段千十五見わたすかぎり神秘の世界
山寺の小鳥のさえずり聞きながら浸つてみるべし芭蕉の思い
山の中我らが目指すその前にそびえ立つのは千十五段
葉が光り生きる光が放たれる命吹き込み造られた寺

さわやかな風が私をつつみこむ輝く緑どこまで光る
花の像足跡二つ刻まれて小銭をそなえ少し満足
五大堂天に登った気分だね疲れもとれて悩みも消える

二学年野外活動

探しぬき見つけた琥珀小なれど汗の結晶心の宝
森の中木々と友とに囲まれて自然とあふれる感謝と笑顔
夜徹し尽きぬ話題に友あきれ寝るのも惜しい床の上かな
予想より流れの速い川の中おそれる心おさえて進む
窓の外天を仰いで見つめると漆黒の夜に琥珀散りばめ
頂の下界の景色見下ろして茂る青葉に心安らぐ
平庭の闇夜に輝く星たちは永遠を旅する命の光
高き木々恐怖乗り込め登りゆく友の声援背中押されて
繊細な豆腐作りの技を知る舌にとろける懐かしい味
山里の澄んだ空気に包まれて肌で感じる自然の癒し
木登りはロープ一本命綱覚悟を決めててっぺん目指す
平庭の緑輝くブナ林雫したたり雨音響く
凜とした内間木堂の冷氣から息づく歴史肌で感じる
手の中で木皮の香り広がって心地良い風夢のひとつとき
内間木の鍾乳洞の奥深く歴史を刻む水が滴り
悠然と我ら見下ろす岩手山広大な地に凜とたたずむ
透き通る水のキャンパスカヤックが水面に描く「時」という名で
民泊で家族のようにつながった心に残る刻まれし時
バスの窓涙浮かべる母の顔を振り続け別れを惜しむ
久慈の宿たった三日の大家族想い出たちが頬を伝った
間材でノコギリの音身に染みる木漏れ日浴びて汗滲んでく
せせらぎの深い音色にさそわれて波うつ空に舟をこぎだす
木漏れ日の澄んだ光を身に浴びて白樺林に心奪われ
最終日別れのときが近づいて友と話した夜が懐かし
木もれ日が若葉に注ぐキラキラとくちた枯れ木も久慈の美となる
人と人心かよわし三日間我を和ます第二の故郷
寝転んで夜露気にせず草の上星を結べばみんなの笑顔
里の味はずんだ会話思い出し惜別の時涙こらえる
透き通るガラスのような水面を手汗握りオールひとこぎ
新緑の森の香りが芳しく菖蒲彩る草花の道

暗やみで鍾乳石が照らされて歲月重ね時の宝石
夕暮れの囲炉裏の炭に火が灯り友との会話熱を帯びゆく
林業で額に汗し枝を切る陽が差し込んで新芽育む
空きつ腹五臓六腑にしみわたる岩手山見てアイスほうばる
琥珀には多くの思い詰まつてるまるで小さな太陽のよう
感涙の友と過ごした異郷の地「また会おうね」と心刻みし
人のよう磨いていけば輝いて永遠に輝く勾玉の石
新緑の木々に隠れし鍾乳洞時代の流れを静かに重ね
霧深き雨が降る中山登り友との会話弾む山道
水しぶき歓声・悲鳴飛び交つて水面に映る 友の笑顔よ
凜と立つ白樺たちが耳澄まし鶯の声響きゆく森
迫りくる闇と寒さに足すくむ背中を押した友の呼び声
宝石のごとく輝く星の下友と肩よせ流星に願いを
久慈の空友と見つけた流れ星刹那に消えた命の光
美しき岩手の自然満喫し生きる喜び大事に思う
「ありがとう」想いを乗せた流れ星久慈の空まで届いた証
野活の夜ばあちゃんと見た星空は心に残るプラネタリウム
木々たちを倒した跡の切り株に生きた証の年齢見える

三学年修学旅行

てっぺんで街を見下ろす窓越しにビルは消しゴム人は米粒
三日間知らない土地に行っただけかと思ひ出は一生ものに
晴れ渡る都会旅した三日間夢の時間も今は思い出
きらきらとデイズニーシーではじけ飛ぶ心に刻む夢のひとつ
中華街他国の人と話したらたどたどしくも心伝わる
横浜の高いシンボル昇り切りここの全てを四度見渡す
赤レンガロウソク作り時間かけ小さな明かり心を照らす
バスの中夢の景観窓の外天につらぬく武蔵の樹木
歩きたびほおをかすめる潮風と異国の風景地から足浮く
見上げれば高さを競うビル達よ今の僕らとどこか似ていて
知らぬ土地で分けてもらった温かさ次は自分が誰かに届ける
駅の前差しのべられた温かさ助けられたその一声に
窓の外萌える緑がいつの間に夜を彩る黄色となりて
氷川丸華やかな過去語るハーモニカの音あたりに響き
市街地はひしめくビルで輝くが港は船と海で輝く
なぜだろうありきたりな夜景なのに友と見た分輝いていた

初日からいつもより時二倍速あつという間の夢の国かな
一瞬のドラムラインの踊る音聞いてみたいなもう一度だけ
ブルーマン強い眼力青い顔知らない間に不思議世界に
デイズニーシー夢が詰まった水の国苦い思い出水に流れる
目を細め港を臨む海風になびく前髪掻きあげながら
行く度も夏の終わりに行く旅を思い返すと輝いているビル
彩る夜景バスの中窓の向こうに新世界あり
思い出は永久に輝く宝物心に抱いて未来へ繋ぐ
車窓から別れを惜しみ見てみると残暑の空に天空塔が
青い空輝き放つ議事堂よ再度行くのは夢のまた夢
横浜の海風渡る空と海瞳とともに青く輝く
我の目に天空届く空の塔心の中で今夢を持つ
バスの中ゆると進む行き帰り親しみの場にほほえみ絶えず
シーパラで友と眺めた熱帯魚色とりどりで宝石みたい
長き日の役目を終えし電波塔新たな塔に未来をたくす
開国の歴史に思いはせながら友と歩いた横浜の街
帰り道過ぎ去る景色バスの中見るものすべて名残惜しくて
外見れば都会の光映す海ゆらりさまよう夏夜船
蝉時雨横浜湾に流れゆき猛暑の夏の心和ます
ホテルから三人で見た観覧車十二時に咲く一輪の花
海風の潮の匂いが流れゆく名残惜しいと心に残る

一学年合唱コンクール

鈴虫とかえるが奏でるハーモニー自分たちしか出せない音で
舞台裏クラスの心一つにしいざ幕開ける一組の歌
響かせよ我らが思いのせた歌全ての人の心に届け
コンクール輝く仲間笑顔歌共に過ごした日々忘れない
虹のよう色とりどりの歌声が空に輝き一つとなりて
音符だけ一人ぼっちじゃ意味がないみんながいるから合唱になる
全員で奏でた歌は透き通りホールに響き一つになった
あの日からクラス指揮する役となりみんなの想いが重なり揺れた
ハーモニー流れるように響いてるまるで豊かな七色の帯
ホール内澄み渡った声響かせて歌った歌は良い思い出に
合唱はひな鳥からの親鳥で気づけばみんな羽ばたいている
ブルブルと歌い出すのは手足なり負けじと歌う私の心
金目指しステージそで手のひらにみんなで書いたニコニコマーク

一の五の心奏でるハーモニー三十六の絆の証
歌声は心をつなぐ見えぬ糸たくさん結び一層強く
高らかに友と歌いしいつまでも夢の世界は心の中に
真冬日にホールに響く歌声に三年生の立ち感じる
涙こえ作り上げた心の輪響け僕らの努力の結晶
級友と心をついに歌う唄大きな絆が命吹き込む
一人ずつ輝く歌声響いてるそれを束ねるクラスの絆
響く歌汗と涙の激動を被災地巡る絆の声が
未来への思いを胸にいざ出陣はじけるファイトでみんな笑顔に

二学年合唱コンクール

友情で熱くまとまる一組の笑顔と絆金に輝く
二の一の団結という種をまき金賞という花を咲かせた
練習は太い木となり歌声が光輝く実をもたらし
一組の革命起こすはあもにい響け歌声声の砲弾
団結力大事さ学ぶコンクール悔しさバネに一步踏み出す
胸の中秘めた想いが音に乗り熱き旋律心流れる
歌つてる何も感じず 歌つてるクラスのためにみんなのために
ばらばらな花弁(クラスメイト)が合わさって得たものそれは銀の入賞(たんぽぽ)
交じり合う三色の色ハーモニー一度きりの絆のアート

三学年合唱コンクール

緊張で人つて書いて飲み込んでまた飲み込んでさあステージへ
当日に友達くれたお守りが緊張ほぐす勇気となった
音合わず試行錯誤し出来た歌心を合わせ皆で奏でる
旋律が青い山々映し出し共鳴し合う大地と我ら
緊張が胸締め付ける舞台裏ふざけた掛け声みんな笑顔に
霜月にあまたの思い奏でつつ降りたつ光心染めゆく
コンクール自信と希望胸に抱き円陣組んでつながる心
スメタナの意志が伝えし故郷が大河になりて今流れ行く
モルダウの川の流れを表して響き合う音今も消えない
涙した皆が奏でた旋律はホールの中で流れて消えた
泣き合って思い確かめ響かせたあの日の歌を忘れない
合唱の大輪の花咲き誇る秋に花咲く向日葵のように
信じると決めたその時響き合う我らの声は魂歌(レクイエム)となり
本番の数秒前の緊張はホールに来たら声と吹き飛ぶ

会場にみんなで奏でるハーモニー未来の僕へ思いよ届け
この町に響き届ける歌声は未来を願うわれらの希望
震災のありし年にも歌えると感謝かみしめラストステージ
この手紙僕らの思い伝えたい言葉に出来ず歌で伝える
肩を組み金賞とるぞ「不安なし」心一つに立つ大舞台
力込め大地を駆ける四分音符高くはばたけ若人の声
ハーモニー虹の架け橋渡つてく響け歌声届け心に